

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

【氏名】 佐々木祐

【所属】 京都大学大学院 文学研究科

【研究題目】

メソアメリカ地域における虐殺の記憶をめぐって：記憶・尊厳回復プロジェクトの展開とその可能性

【研究の目的】

現代世界における重要な課題のひとつである「多文化共生・多民族共生」が可能となる社会はいかにして構築可能なのか。政治的・民族的・社会的ヘゲモニーのただなかで、歴史的に従属的な位置におかれてきた人々の具体的な経験によって、単なる制度としての「共生」はまさに偽善的な戯画としか映らないだろう。表面的な和解に基づいた社会統合を急ぐ国家エリートの思惑とは裏腹に、長きにわたる暴力的なコンフリクトが残した傷跡は、人々の記憶のみならず、社会全体における共同性再構築という課題にも大きな影響を与えつづけている。

こうしたグローバルな課題をふまえ、本研究はメソアメリカ、とりわけグアテマラおよびメキシコ・チアパス地域先住民の具体的な経験を軸に、ひきつづく低強度紛争(LIC)という日常のなかで人々がいかにその傷と痛みを癒し、その記憶と尊厳を回復しようとしているのかに焦点を当てる。そうしたとりくみの中で、国家的なスキームに回収されることのない、新たな社会再構築の可能性を探ることが、本研究の目的である。

【研究の内容・方法】

現地調査および資料分析により、この15年間の取り組みの経緯と今日的状況、および現在直面している問題が浮き彫りとなった。それ以下の通りである。

1 グアテマラにおける事例研究

80年代の内戦において、高地地域に住む諸先住民集団は、潜在的な「ゲリラ予備軍」として規定され、軍―警察―準軍事組織による徹底的な弾圧の対象とされた。こうした暴力の被害者となった先住民女性たちのネットワークが、「連れ合いを奪われた女性たちの会 CONAVIGUA」であり、彼女らを中心として、新たな語りと記憶の回復プロジェクトが進展中である。

ただし、内戦終結から15年以上経過した現在も、紛争の淵源であった社会的不平等と民族的分断の構造はほとんど変化していない。90年代末に全国的に取りくまれた真相究明活動も、未だ不十分なままほとんどその取り組みを停止してい

る。国内外の社会運動の圧力を背景に、国家再統合の一つの方策として、半ば国家的なプロジェクトとして取り組まれたこうした活動は、グアテマラにとっての喫緊の課題が経済問題に移行した現在、すでに過去のものとして処理されはじめているわけである。こうした状況のなかで彼女／彼らは、今度はきびしい貧困状況を生き抜くための戦いを強いられているといっている。

ただし、こうした新たな相互扶助や草の根のネットワーク構築に、かつての記憶回復プロジェクトの経験が活かされていることが明らかとなった。「本来の」目的を十全には達成し得なかったこうした運動ではあるが、そこで形成された社会関係が、現在における新たな生き延びの重要な資源として流用・再活性化されているわけである。

2メキシコにおける事例研究

1996年、チアパス高地地域アクテアル村において、先住民組織「サパティスタ民族解放軍 EZLN」支持者が多数が準軍事組織によって多数虐殺され、その後も半ば当局の黙認のもとで暴力的な攻撃が続いてきた。こうした、制度化された半国家的暴力は、単に先住民運動に向けられたものとしてではなく、メキシコ市民社会への大きな脅威として、90年代後半以降位置付けられてきた。政府・軍・警察が当初描いた「先住民同士の抗争」というシナリオは、具体的な社会運動の展開の過程で崩壊していったわけである。2000年代に入り、サン・サルバル・アテンコやオアハカにおける民衆運動への暴力的な弾圧が発生するが、こうした事例をアクテアルの虐殺と関連させることで、国家的暴力への広範な抗議が展開していった。

だが、近年のいわゆる「麻薬への戦争」キャンペーンが政府によって大々的に喧伝される過程で、こうした国家的暴力が「必要悪」として容認されようとしている。チアパス地域先住民の経験を起点として、一度は成立したはずの社会的連携が、再び破壊されつつあるわけである。こうしたメキシコの軍事化傾向は、だがしかし、新たな抵抗の萌芽を生みだしつつある。2006年の「別のキャンペーン」以降に形成された社会的交通が、その資源として利用されていることも明らかとなっている。とはいえ、ローカルな問題を個別に連携することで成立したこのオルタナティブな関係は、現在の急速なメキシコ社会の新自由主義的再編の潮流からはやや立ち後れていることも事実である。

【結論・考察】

研究によって明らかになったのは、メキシコおよびグアテマラにおける記憶・尊厳回復運動の成果と限界である。まず、上で示したように、大きな社会変革期に生成された新たな人的・組織的關係は、運動が後退局面にある現在においても、依然としてその重要性を発揮し続けているという点である。根本的な社会矛盾や社会構造が解決されない中、こうした社会関係は「本来の」目的をやや逸脱しながらも、有効な対抗の回路として機能しているわけである。また、こうした取り組みは、新たな(必ずしも親和的ではない)諸運動を創発しつつあることも明らかとなった。だが次に指摘しておかなければならないのは、旧来の国家や政党政治システムとは別個のものとして展開するこうした運動が、再び周縁化され巧妙に分断されつつある現状である。一時、その脆弱さを露呈したかにある国家システムは、21世紀のグローバルな危機に対応する形で、より露骨な介入とヘゲモニー構築の機関として再生しつつある。いわゆる「ラテンアメリカの左傾化」という空虚なレトリックとは正反対の、極めて不安定な社会運動の現状が明らかとなった。こうした成果と限界とが、今後どのようにに関連しつつ展開していくのかをより微細に分析してゆく必要があるだろう。